“声なき声”に耳を傾ける

活動写真弁士　澤登　翠

「活動写真弁士」をご存知ですか。無声映画の上映中、場面に合わせて登場人物のせりふやナレーションを語る人のことです。その語りのことを「活弁」といったりもします。

無声映画にはところどころに字幕がついており、弁士は、この字幕と字幕の間のせりふやナレーションの台本を自分たちで工夫して書き、語っています。作品の本質を理解し、いかにおもしろい台本を書くかが弁士の腕の見せどころです。そのためには映画を繰り返し見て、映画の内容をつかまなくてはなりません。筋立てだけを追っていくと、映像の細部を見落としてしまいますから、何回か全体を通して見た後、シークエンス〈※〉ごとに、ときには映像を一時停止して、じっくり鑑賞していきます。この時間は、映像が語りかけてくる〝声なき声〟に耳を傾ける、心躍るひととき。もともと映画ファンであったところへ、松田春翠師匠の活弁を聴いて弁士を志した私。モノクロームの無声映画に目を凝らす時間は、なんともいえず幸せな時間なのです。

世界の喜劇王チャップリンの親友で、アメリカ無声映画の大スターだったダグラス・フェアバンクスの主演作に「バグダッドの盗賊」という大作があります。アラビアンナイト風なおとぎ話で、バグダッドのカリフ（王様）の姫に恋をした若き盗賊アーメッドが、冒険の果てについに姫と結ばれるという波乱万丈のスペクタクル娯楽作。一九二四年の作品ですが、当時最新の撮影技術を駆使し、カリフの宮殿の華麗なセットや、空飛ぶじゅうたんなど見どころいっぱいで、快男児ダグラス・フェアバンクスの胸のすく活劇も堪能できます。

こういう映画の語り・活弁は、言葉も大時代的に、美辞麗句を連ね、リアリズムでないファンタジーの楽しさを表現するものが画面に合っていると考え、ラストシーンにはこんな言葉を考えてみました。主人公の盗賊が真人間になって悪者を倒し、姫とともに空飛ぶじゅうたんに乗り大空へと舞い上がる場面です。

「アーメッド、英雄にしてまことの花婿！」
轟く凱歌、祝福の声。
「いざ行かん、姫とともに！」
アーメッドと姫を乗せた魔法の絨毯は、陽に煌く宮殿上を旋回し、麗しき都を後に蒼穹へ――。

雲を越え、どこまでも、幸福と歓喜を乗せてどこまでも――。
やがて、緑濃き糸杉の陰、二人が手にするは愛の果実。その命は永久に春を寿ぐ。

さて、では所変わって日本の時代劇にはどんな言葉・活弁がふさわしいでしょうか。

私の大好きな大河内傳次郎が浪人と水戸黄門の二役を演じた「水戸黄門」（一九三五年）の剣戟場面に付けた活弁をご紹介しましょう。

紫電一閃、静謐たるべき大江戸の夜は、忽ち怒号渦巻く修羅場と化した。
月影青く風寒く、地には草木、声も無し。静寂に窃す剣戟の響き！

樹間より漏れる月光が刀身に影を刻み、風が殺気を孕んで浪人（大河内傳次郎）に迫る場面。あまり長い活弁では緊迫感が薄れてしまいますので、このような言葉でタッタッタッと畳みかけるように語った後はしばらく沈黙します。「剣戟の響き！」を合図にチャンバラ音楽が流れ、乱闘場面の興奮が高まる寸法となっているからです。

趣を異にする喜劇などでは、活弁の言葉はもっとあっさりと、声のトーンも軽く、ふわりとした感じを醸し出すようにしています。

活弁の音楽的な調子が最も生かされるのはロマンチックな洋画ではないでしょうか。憧れの女優、神秘的で威厳すら感じさせるグレタ・ガルボの無声映画には、こんな活弁を贈りたいです。

川霧がベールのように懐かしい小島を包み、細波ひそやかに恋のロンドを奏でる。露置ける草、名も無き花、目覚めたばかりの木々、鳥のさえずり。大気はいまだ睡みの甘き夢に浸り、東の空に曙の色匂い立つ。
フェリシタス、琥珀の薔薇…。
（フェリシタスは、ガルボの代表作「肉体と悪魔」での役名です）

多彩な無声映画のひとつひとつに真摯に向き合い、映画の語りかけてくるものを聴き取り、画面に合った言葉・活弁を考える時間は愉しく、感受性が活性化されます。活弁は言葉を駆使する芸。映像を的確に表現する言葉の選択こそが弁士の器量なのです。

※物語の中の一連の場面のこと。



澤登　翠
さわと　みどり

東京都出身。「伝統話芸・活弁」の継承者として“活弁”を現代のエンターテイメントとして甦らせ、文化庁芸術祭優秀賞他数々の賞を受賞。日本を代表する弁士として、国内はもとよりフランス、アメリカなどの海外公演で高い評価を得ている。著書に『活動弁士　世界を駆ける』（東京新聞出版局）がある。
ホームページに、活弁のサンプルが掲載されている。
http://sawatomidori.com/